50年かけて学んできたこと！

●「季節の向こうに未知が見える」を読んで！

先日、(株)ニューオタニの尾谷英一さんからいただいた「季節の向こうに未知（なにか）が見える」〔林克著、幻冬舎、2020年10月27日刊〕をご紹介します。

著者の林克〔はやし まさる、ペンネーム〕さんと尾谷さんは高校時代に一緒にインターハイのスキー団体で競い合い、1964年に福島県猪苗代町で開催された**第13回全国高等学校スキー大会**の男子リレーでは、尾谷さんの新潟県立小千谷高校が優勝、林さんの新潟県立津南高校が6位だったそうです。こうしてスキーを通じたライバルとして過ごした高校時代が終わり、林さんは、N体育大学に進学されてジャンプに取り組まれたそうです。この物語は、そこからスタートします。

◇　◇

■季節の向こうに未知が見える　〔著者：林克さん〕

◆第一章　小樽　人生の転機は突然に

N体育大学3年生の主人公・伊庭克彦は、ジャンプを始めて2年目で県大会に優勝し、全日本の大会に出場することができ、小樽で開催されたスキー大会のジャンプとクロスカントリーに出場した。初日のジャンプで転倒して脊髄を損傷し四肢麻痺になってしまう。以前のように手を動かすことも、歩くこともできない現実を受け入れるには時間がかかった。そして半年後、克彦は東京の病院に転院した。

◆第二章　千駄木　苦悩の三週間

東京に戻った克彦は千駄木の病院に入院する。高校時代から付き合っていた聡子が病院にやってくる。それから2週間後、山梨県石和温泉のリハビリテーション病院に転院が決まる。手足の動かない克彦が将来を心配した言葉に対して、「自分が一緒にいるじゃない」と深い意志を感じさせる言葉を言ってくれた聡子。克彦は嬉しかった。アポロ11号のアームストロング船長が人類初の月面着陸をした夏のことである。（注：1969年7月20日）

◆第三章　石和　別れとリハビリテーション

石和温泉のリハビリ病院へ転院した克彦は、4人部屋で同じような境遇の人たちとリハビリを続ける。12月末のクリスマスを迎え、看護師たちが歌や演劇で励ましてくれる中で、克彦は「結局治らないんだ」という長い間押さえていたものが込み上げてきた。そして、自分がノルディック複合に挑戦したいと思った頃のことを思い出していた。さらに、13歳の時に逝った母親のことを思い出していた。聡子との出会いやデートのこと、さらには大学時代に無茶をして交通事故を起こしたことなどが甦っていた。そんな中で、毎週のように都内から通ってくれる聡子に対する申し訳ない気持ちが広がっていった。そして、「もう、これ以上先の見通しが立たない障碍者のところに来てもらうのはやめよう。思い切ってボールペンを手に縛り付けてもらい、大きなたどたどしい文字で、『もう 来ないでほしい』と記した。これまでの感謝の気持ちを表したかったが未練がましい気がした。辛かったが、これでいいんだと無理矢理自分に言い聞かせた。この一通の手紙を送ることによって重荷が少し軽くなったような気もした」と、著者は克彦の別れの気持ちを綴っている。そして、周囲の人たちの援助をもらいながら怪我をして2年を過ぎたある日、ケースワーカーの方から病気や事故で言葉に障碍を負った人たちに訓練や治療を行う「言語療法」の仕事ができるのではないかという可能性を示唆される。退院後、克彦は言語療法室で英語の勉強からスタートする。同期生が卒業して2年3ヶ月後に大学を卒業することができ、専用の装具を付けて運転することもできるようになり、失効していた免許証も再取得することができた。そして克彦は大学教授の研究室に入り、言語療法の勉強に勤しむことになった。アパートでの生活は一人で何もできず、親戚のおばさんが介護してくれた。研修を始めて2年半が過ぎた頃、新潟県のN大学への就職が決まった。

◆第四章　新潟　新たなスタート

N大学脳研究所での仕事が始まった。この時の感情が次のように書かかれている。「物事一つ一つに時間がかかり、動けない自分が惨めでよけい苛立たしさが増すようであった。追い打ちをかけるように患者さんからは手足の利かない自分を見て『お前に何ができるのか』と疑問の目で見られているような気がする毎日であった」と。脳研究室に移って2年が過ぎた頃、始めて仕事が認められて報酬を受け取ることができた。その頃、医局の先輩からの勧めもあり、学位を取るための勉強を始めた。アパート暮らしの私生活では、ずっと介助が必要で何人かの人たちの手を借りて過ごしていた。親戚や近所のおばさんに代わって、高校時代の恩師の紹介で聖書学院の人たちやクリスチャンの方々の介助を受けるようになる。やがて、毎週日曜日に花を生けにきてくれていた松本奈津子さんという方と結婚することになった。克彦が治療を担当した患者さんとの一節がある。「患者さんを通して、互いの心を通わせることにより友達のような間柄になれた気がするときがあった。そこに言葉や身体のハンディキャップを越えた人間としての喜びを感じ、穏やかな幸せの時間を過ごすことができた。また、言語療法士（言語聴覚士）としての仕事の楽しさや、少しでも世のために役立つことができている嬉しさも合わせて感じられた」。

こうして、克彦は研究生になって9年、研究の成果が認められて医学博士の学位を取得することができた。

◆第五章　モントリオール　研究との出会い

克彦は研究のためにカナダ・モントリオールのM大学に奈津子と一緒に飛んだ。そして、平日は研究、土曜日は観光や買い物、日曜日は奈津子の礼拝に付き合うという日々がつづいた。そんな中で、「この街に来てしばらく暮らすことにより、日本との差が自然と感じられた。人々の生活はゆったりとした流れの中で一日を過ごし、親子兄弟の絆が堅く身内で何か起こるとすぐに集まる。誕生日があれば全員で祝い食事をともにする。障碍者（児）に対する偏見はなく、車椅子に乗った自分でも周りの人に対して違和感は全く覚えられない。マーケットでは段差が殆どなく、駐車場に至っては決められてある障碍者のスペースに入る者はいない」と。ある時、車から降りようとしていた克彦に松葉杖をつき、夫人の肩に片手を掛けて歩いていた老人が「何か手伝うことはないかね」と声をかけてきて、大丈夫と答えると、隣の病院に向かっていった。「この違いは、何なのだろう。奈津子も私も言葉にこそしなかったが、思うことは同じであった。これが先進国なので。恐らく人の命、人の心を最優先していて、家族を思い自分を愛する心画国民全体に浸透しているのは、宗教的な背景が存在しているのであろう」と、克彦は感じた。しかし、1年が過ぎた頃に新潟のN大学から呼び戻されて研究途中で帰国を余儀なくされた。

◆第六章　村上　専門学校と若者たち

カナダから帰国して5年が過ぎ、克彦も45歳になっていた。そんな頃、大学で言語療法士として勤めていた彼のもとにリハビリテーション系の専門学校に設立に伴って来て欲しいという話が舞い込んだ。47歳の4月、克彦はその専門学校に移り、学生たちとさまざまな体験をした。また教職に就いて3年目の冬、風邪をこじらせて受傷以来何回目かの重度の肺炎を患い生死をさまよった。回復して専門学校に通う中で、ALS（筋萎縮性側索硬化症）の患者さんを持つことになった一人の言語聴覚士が治療や訓練の後に患者さんを看取った。「患者さんの状態が悪化し他界したとき、彼女は正直苦しかったけれども、普通ではできない経験をさせてもらった気がするとも言ってくれた。終末期を迎え人間としての尊厳が最も重視される中で、貴重な経験をしたのではないか。このような場に身を置くことができるこの職種が地味ではあるが貴い仕事なのだと改めて感じることができたような気がする」と。2001年9月11日、アメリカの同時多発テロの悲しみを越えて、翌年3月に最初の卒業生たちを送り出した。

◆第七章　これから

東日本大震災に襲われて暫くした頃、妻の奈津子が心臓僧帽弁の再手術を受けることになった。15時間近くに及ぶ手術であったが手術は成功した。克彦も古稀を迎えた。21歳6カ月で受傷し、石和の病院でケースワーカーの先生から「今大変かもしれないけど、将来怪我をして良かったと思える日がくるかもね」という言葉を噛みしめる。生活の中で体の不自由さを感じた不幸な気持ちが、仕事が得られたことである種の幸福感を持てるようになったのは『なぜ』と考える。

「まずは前に目標があったこと。その目標に向かってコツコツとスローながらも努力をしてきたこと。諦めないこと。そうしてきた自分を周りの多くの人たちが支え引き揚げてくれたことなどがある。そのためには人間関係を良好に保つこと。良好さを維持するためには相手に対して謙虚な姿勢で対峙すること。また忍耐も必要となる。しかしそれは決して妥協することではなく自分の考えはそのまま伝える、そうした中でお互いが物言える、あるいは許し合える関係になることであろうか。このような考えが今の社会に通じるかは分からない。（中略）。他人との関わりを通して喜びや苦しみなど人間らしい感情が生まれ、それがまた生きていることの証の一つにもなっているだけに、どちらかというとそういう機会に恵まれない現在の人たちを見ると少し寂しい気持ちがする。この年になると、人間はなんのために生きるのかという想いを誰もが持つかもしれない。これまで生きたことを、いやむしろ生かされてきたことを本気で思うこの頃である。苦しくてどん底のあまり、そこから逃れたかったとき支えてくれた20歳そこそこの女性、家族、恩師、学び舎や職場の同僚、このような人たちに救い挙げられてきた。人と人との関わりの中で活かされてきた自分を強く感じている。感情が穏やかになってきたのは50代に入ってからであろうか。それまでは悔しくて切なくて自分の身の置き場を失ったこと、他人を暴言で傷つけたこと、言ってはならないことをやってはならないことをしてきた自分を恥じ、苦しみもがいたこと、そうした想いが最近では殆どなく淡々とした生活を送っている。これまでの人生に感謝である。改めて感じることだが半世紀をかけてこれまでに教えられたことは、どのような状況でも謙虚な姿勢を保つこと、耐えなければならないと感じたとき躊躇なくそれを実行することである。この二つのことは50年かけて学んだ気がする」と、克彦は自分の半生を振り返り、人生での学びを綴っている。そして、「ここを退職した後、ささやかな目標を持っている。家の一室を使って高次脳機能障害、認知症、失語症などで生活の場を狭められている近隣の人たちを何らかの形で援助したいと考え、週一で治療や相談を始めた。長年想い描いていた計画である」と物語は結ばれている。【「季節の向こうに未知が見える」林克著、青書きは本書からの抜き書きです】

◇　◇　「夏炉冬扇」に記録するために2度読み、作者の感情が強く感じられた部分を原文のまま引用させていただきました。順風とは言えませんが66年間平凡に過ごしてきた私からすると**伊庭克彦**の「壮絶な人生」ではありますが、最終章の『なぜ』から始まる克彦の述懐を読ませていただきホッとしている自分がいます。**尾谷さんとご友人の林克さんに感謝！**